
公立小学校における大正新教育

——東京市瀧野川尋常高等小学校の「総合教育」——

鈴木 そよ子

はじめに

大正期から昭和初期にかけて、児童中心の教育を志向する大正新教育が教育界に大きな影響を与えた。この頃、東京府・東京市内にも、明治期からの教科書中心・教師中心の教育から、児童中心の教育へと転換を図った公立学校があった。瀧野川尋常高等小学校の「総合教育」は、浅草区富士尋常小学校の「生活学校」、本所区横川尋常小学校の「動的教育」、本所区業平尋常小学校の「過程体得の教育」とならぶ新教育実践であった。

大正新教育に関する先行研究では、師範附属小学校や私立学校が主な対象であった。¹⁾ それに対して、筆者の研究の特徴は、上記の小学校の事例研究を重ねて、公立小学校における大正新教育実践を明らかにし、公立学校教育における新教育の意義について考察する点にある。

本論文においては、まず、瀧野川尋常高等小学校の教育環境や新教育の歩みを辿り、次に、学校長山崎菊次郎の課題意識と置かれていた状況を把握する。そして、山崎校長の進めた学校づくりについて、教員構成、陸上競技、学校劇の3点から述べる。大正期の学校劇から、昭和期の「総合学習発表会」へと発展的に継承されていく点が、資料的に重要な点である。さらに、

これらの教育実践の創造を支えたものとして、校内の教育研究活動と公開指導研究会の実施状況についてまとめる。

学校劇から発展した学習発表の方法が、瀧野川尋常高等小学校の新教育のもっとも特徴的な点である。当時の学校劇が急速に廃れていったなかで、総合的な学習と一体化させた点は他に例を見ない。

本論文で使用した瀧野川尋常小学校に関する資料は、まとまって保存されてはおらず、教員の雑誌論文、著作、瀧野川尋常高等小学校・瀧野川小学校の出版物、都立公文書館所蔵公文書、学校保管の資料、戦前・戦後の先生方からの提供資料、インタビュー、ご遺族からの情報などから構成している。なお、瀧野川尋常高等小学校は、戦後、東京都北区立瀧野川小学校となり、今日に至っている。本論文において戦後の学校を指す場合は戦前と区別して、「瀧野川小学校」と表記する。

1 新教育実践校としての歩み

瀧野川尋常高等小学校（以下、瀧野川小と称す）の位置、教育環境、新教育実践の歩みを辿ることによって、同校の新教育を概観する。

1889（明治22）年、東京府北豊島郡の田端、中里、上中里、西ヶ原、瀧野川の五ヶ村が合併し、瀧野川小は、新瀧野川村の最初の公立小学校として、1890（明治23）年に開校した。1913（大正2）年には、瀧野川町立瀧野川尋常高等小学校となり、1932（昭和7）には東京市瀧野川区瀧野川尋常高等小学校となる。

開校時は木造の2階建4教室、教員3名、児童90名（尋常科81名・高等科9名）という、のどかな農村のなかの小規模な学校で、複式授業を行っていた。²⁾瀧野川村が町となり、東京の近郊農村から、工業地、住宅街へと変貌し、人口も激増していく。それにつれて、住民層も変化し、芸術家や公務員、王子製紙の管理職等、高学歴者の子弟が地元の小学校に通い始めた。このよう

な地域の変化の中で、瀧野川小の教育環境も明治期からの教育を見直し、新たな教育を求める機運に満ちていた。

瀧野川小が開校した当時は、村の小学校は1校だったが、瀧野川小も規模の拡大と分校の設置、分校の独立を繰り返していく。そして、1939(昭和14)年には、瀧野川区の小学校は11校に増加している。

瀧野川小の児童数をみると、1920(大正9)年は、尋常科1311人、高等科276人、合計1587人となり、校地の拡張と校舎の増築が続く。1934(昭和9)年には、瀧野川小設立以来最高の生徒数2376人を数える³⁾。1学級の生徒数は、60数人であった。昭和期の報告によると、3年生までは全部男女混合学級、4年生以上は学級の事情に即しながら決めており、そのなかで男女混合学級が増えていた。そして、担任教員は6年間持ち上がり⁴⁾を原則としていた。瀧野川小の父母や地域の人々の理解や協力を得るための組織として、1919(大正8)年に、児童保護者会が組織された⁵⁾。1935(昭和10)年時点では、尋常科25銭、高等科50銭の会費で、年額1万円を越える予算で運営されていた。山崎校長は、この児童保護者会を学校財政の機関と位置づけており⁶⁾、並行して、母の会も発足させ、これは、母の教育の機関として、また、各学級に即した備品や教具等の補助機関として位置づけていた⁷⁾。

学校全体で取り組んだ最初のものが陸上競技であり、1922(大正11)年の小学校対抗陸上競技大会で、尋常科の部の優勝校となり、その後、数年にわたって優勝を続けている。学校として取り組んだ二つめのものが、1923(大正12)年からの学校劇の研究で、翌年の映画館での公開がマスコミからも脚光を浴びた。

この頃、東京市の公立小学校の中でも様々な新教育実践が試みられていた。また、師範附属小学校でも新教育の率先した指導形態が試みられていた。同じ志をもつ教員たちによる学校の枠を超えた交流も盛んに行われており、他校から刺激を受ける機会は多かった。このような状況のなかで、瀧野川小は、特に奈良女高師附属小学校の学習法から影響を受けている。昭和初期から

「総合教育」を提唱し、1929（昭和4）年から公開指導研究会を実施し、「総合学習発表会」も並行して毎年実施している。さらに、1935（昭和10）年の公開指導研究会では、「新総合教育」と称するに至る。このような教育実践研究は1937（昭和12）年まで継続された。

II 山崎菊次郎校長

瀧野川小が学校全体で新教育実践に取り組もうとした出発点には、山崎菊次郎校長の問題意識があった。そして、教員が教育研究のできる学校体制を作っていたのも山崎校長であった。彼の指導によって、瀧野川小の新教育実践が形成されたと言っても過言ではない。山崎校長の人物像とおかれていた状況についてみたい。

山崎菊次郎は、1883（明治16）年、埼玉県に生まれ、埼玉県師範学校を経て、東京府師範学校に入学し、1906（明治39）年3月同師範学校本科を卒業する。東京府北豊島郡板橋町板橋尋常高等小学校訓導をへて、1912（明治45）年2月に瀧野川町第一尋常小学校校長となり、学校財政や教員待遇の改善に腕を振るった。瀧野川小に第二代校長として赴任したのは、1914（大正3）年3月、31歳の時だった。それから1937（昭和12）年2月までのほぼ24年間にわたって瀧野川小の学校長を務めることになる。⁸⁾

彼の赴任は、教員待遇にかかわって起きた教員及び6年生の同盟休校の責任をとる形で初代校長が辞任した後の人事であった。町の有志が第一小学校の山崎校長を推薦したのだった。第一小学校での学校経営の実績が上がっていた時期でもあり、また、瀧野川小の複雑な内情もわかっていた彼は、恩師瀧沢師範学校長に相談の上で赴任を決意した。初代校長時代からの悪習や、人間関係のしがらみに直面し、さらに、暴漢に襲われるような身の危険を経験するなかで、学校を立て直すための教育実践をつくり出していった。

山崎校長は、学校を立て直すに際して、第一に教員構成を替え、先に触れ

たような父母や地域の人々の協力をえる体制をつくり、新教育実践校との親交を重ねながら、教育実践を形成していった。第二に試みた教育実践が、陸上競技と学校劇であり、昭和期に入って「総合学習」「総合教育」が構成されることになる。これらの教育実践研究は、山崎校長が東京市深川尋常小学校に転任する1937（昭和12）年まで継続された⁹⁾。

山崎校長の人物像は、師範学校時代、教員時代のエピソードからもわかるように、実行力に優れ、信念を貫き、文部大臣までも説得したほどに強い意志の持ち主でもあった。1924（大正13）年当時の『東京朝日新聞』では、山崎校長を次のように紹介している。「就任以来児童の体育と情操の涵養に努めた結果同村の運動と児童劇は全国的に著名になった。同氏は性闊達、決行果断の人、所謂教育家型を脱した親分肌の強さと優しさを兼ね備えた名校長である。服装態度に微塵の隙もなく説く教育方針も頗る造詣の深いものがあり最近自学自習主義の立場から私財を投じて新読本を編纂配布した熱心家で本年四十二歳家庭では二男二女の優しいお父さんである。」¹⁰⁾

III 教 員 構 成

学校を変える具体的方法の第一歩が、教員の交替であった。戦前の学校長に与えられていた人事権を存分に生かしながら、校長の学校経営方針を理解し、共有できる教員構成を作るための教員構成を作っていた。

教員の規模や構成は、分校、独立を繰り返す中で、年によって変化している。公文書の記録でわかる昭和期のものを、表1「瀧野川尋常高等小学校の教員数」として示す。1940（昭和15）年度の教員数の減少は、尋常高等小学校から尋常小学校への移行に伴うものである。

『滝小八十年のあゆみ』の「旧職員一覧」¹¹⁾によると、大正期・昭和初期を通じて、ほぼ10人前後の転任教員があり、比較的短期間で転出する教員と、長期にわたって務める教員層に分けられる。そして、後者は、雑誌論文等で対

表1 瀧野川尋常高等小学校の教員数（1932～40年）

年	本科訓導	代用訓導	専科訓導	専科代用訓導	短期現役	計
1932	31	3	3	0	0	37
1933	32	2	3	2	1	40
1934	33	5	3	2	0	43
1935	37	6	4	1	0	48
1936	28	5	4	0	1	38
1937	32	3	3	0	1	39
1938	36	4	3	1	0	44
1939	38	2	5	0	0	45
1940	26	1	2	0	0	29

注・東京市役所編『東京市教育関係職員録』（1932～1940年、年度ごとの刊行物）
都立公文書館所蔵，にもとづき作成。

外的に教育研究や教育実践を発表している教員と一致する。瀧野川小の新教育実践を形成していった人々でもある。

山崎校長は新任の採用，新任者の教育力の育成に力を注いだ。「教員採用については十分詮衡いたしました。まず，候補者に逢ひまして，その希望や意見等を聞きます。次の日は実地授業をして貰ひます。それから二三の問題を出して解答を求めます。さうして愈々採用することに決定して，その手続きがすみますと，少くとも一二年間は高等科を担当して貰ひ，学校の雰囲気慣れさせます。研究もして貰ひます。私の学校は，総合教育で，大抵尋常一年から六年まで持上がることになつてをります。新任の方は，未だそれに慣れてゐないとおもひますからです。」¹²⁾と述べている。校長は，東京府に限ることなく，広範囲から人材を求め，慎重な選考と初任期の計画的な指導を経ながら，教員を育てていった。

水上健二（1920～39年・25～44歳在任）は福岡県から上京し，首席訓導として瀧野川小をまとめあげていった人物である。特に国語教育についての造詣が深く，『生活化郷土化作業化 小学国語読本精説』（文禄社，1933年）等の著作があり，また，歌人でもあった。

本田正信（1926～38年・25～37歳在任）は、山口県生まれで、台湾総督府台北師範学校出身。29年（昭和4）年度から6年間男女混合学級を担任しながら、とくに学級集団が各個人にとってもつ意味、自然発生的なグループの活用について実践的な研究を重ね、昭和10年代には、集団主義教育に力点を置いた研究を進めた。瀬川頼太郎共著『母への教育報告』（学芸社、1936年）、『躰物語』（三井出版商会、1942年）の著作があり、雑誌論文も多い。

岡山光雄（1925～47年・24～46歳在任）は、福岡県出身で、彼の新聞学習の研究を発表した『新聞学習—子供に新聞をどう読ませるか—』（先進社、1932年）、『新聞学習提要』（中文書房、1932年）は教育界のみならず、マスコミからも注目を浴びた。¹³⁾

さらに、富士小学校の谷岡市太郎夫人である谷岡正枝（1925～36年在任）は、合科学習の表現方法としての創作演劇の研究をし、高野柔蔵（1928～52年在任）は、独自学習・相互学習を活用した読方教育を実践し、桐谷四郎（1924～42年在任）は修身の生活指導研究を進めた。西はる（1915～44年在任）は自学自習の裁縫教育、新井つね（1916～40年在任）は家事教育、北郷留蔵（1926～38年在任）は理科教育において、というようにそれぞれの教員が研究テーマをもち、教育実践研究を進めるということが、瀧野川小の構成員に求められる基本姿勢でもあった。

IV 学校づくりとしての陸上競技と学校劇

山崎校長は、学校を変える具体的な方法として、その教育実践の支柱を陸上競技と学校劇においた。これらは、教員と生徒が共通の目標を持つことを考えての選択であったと同時に、第一次世界大戦が教育に与える影響を敏感に捉えたうえでの方法でもあった。

陸上競技では、「体育を科学的に理科的に眺める為に、従来の選手制度を一擲して、その合法的立場を主として理科に求めた。即ち、理科の生理、体操

の解剖といったものを体操技術の前提とし、かくして生れた体操の個性的技術の集約として、陸上競技選手を手に引きよせたのである。¹⁴⁾」師範学校体育科の教員・学生の指導を受けながら、従来のような選手制度をとらず、教員も児童もともに練習時間をとることを方針とした。この方針は、資料1「昼食後全校駆足規定」にも見ることができる。

資料1 昼食後全校駆足規定（1918年）

- 一 始業前（午後）十分ニ集合シテ駆足ヲ行フ
 - 二 集合整列方法ハ本校規定ノ通学組合（校外取締ニ地方部九ヶ部編制）各部分ニヨル
 - 三 運動方法トシ〈テ欠カ〉ハ看護主任当番ノ指揮ニヨリ各部長（児童）監督教員全部部下ヲ率ヘテ行フ
 - 四 時限ハ十分以内トス（雨天ハ欠ク）
 - 五 児童中身体ニ故障アリテ駆足ヲ行ハサル者ハ医師ノ診断書ヲ提出セシム
 - 六 如何ナル場合ト雖モ児童職員共学校長ニ届出ナクシテ駆足ヲ行ハサルコトヲ得ス
- 第一 教授（略一鈴木）
第二 訓練（略一鈴木）

注・練馬区教育史編纂委員会『練馬区教育史 資料3』第4巻，東京都練馬区教育委員会，1974年，p. 661。省略した「第一 教授」「第二 訓練」の項目には，指導方法，実施方法が詳述されている。

これらの練習の成果を学級毎に競う場として，学校行事の運動会，五年以上の運動団の記録会，長距離競走を活用し，結果的に，対外的な陸上競技での活躍もめざましいものになった。たとえば，報知新聞社主催の第3回小学校対抗陸上競技大会（1922年）以来，連続4回にわたって尋常科の部で優勝し，1925（大正14）年度には高等科の部でも優勝している。¹⁵⁾

山崎校長の意図した，全校の児童と教員が共通の練習と目標をもつこと，そして，学校がまとまることが徐々に達成されていき，また，都市化の波で練習場が得られなくなったことも重なり，昭和期には研究の重点が学習研究に移行していく。

また，学校劇については，1923（大正12）年の春に，5年2組長里清学級

を研究学級として始め、従来の学芸会との違い、そして、当時の流行とも言えるような学校劇との違いを明確に意識しながら、準備が進められた。「元より教科書を離れないのですから、世間一般の行き方とは少々異り居ります。今度上演する脚本の如き大部分は本校の研究教員が教科書中よりのヒントで新らしく作ったものですし、舞台監督から背景、小道具、衣裳、製作、総てに亘つて一切校内で教員と生徒とが一緒になつて工夫したものです。¹⁶⁾」1924（大正13）年2月20日にはじめて公開した。この公開発表会は、学校近くの映画館・万歳館で、父兄を迎えての催しとなった。これを知った新聞社各紙から取材があり、東京朝日新聞、報知新聞、東京日日新聞、萬朝報の各紙で大きくとりあげられ、話題となった。¹⁷⁾この時のプログラムが、資料2「学校劇の発表会 プログラム」である。

しかし、当時は、学校劇に対する行政側からの警戒が強まっていた時期でもあり、山崎校長は東京府庁の近藤学務部長の前で、さらに江木千之文部大臣の前で、学校劇に対する抱負と、実験上の自信、教育の効果を力説することになった。免職を覚悟してのことだったが、その後何事もなかったという。瀧野川小の学校劇が認められたのは、この時の問題点が、生徒に見せる前に学校外で公開した点だけであり、一般的に問題になっていた劇の選定や服装・演出等の点では、文句のつけようがなかったからだ¹⁸⁾と見られている。なお、このころ盛んに行われていた学校劇のなかには化粧や衣裳、演出などの点で華美に走ったものがあり、学校生徒に相応しくないとの訓告が岡田良平文部大臣によって出されるのは、同年の4ヶ月後である。

資料2 「学校劇の発表会 プログラム」（1924年2月20日）

第一部

1. 開会の辞山崎校長
2. (童話劇) 七匹小山羊..... (二女)崎山監督
3. (講演) 此の頃の独逸の少年少女
.....日本大学教授・帝国少年団副理事長原惣兵衛氏
4. (童話劇) 珊瑚の宮..... (四女)森山監督

5. (童話劇) 巡礼おその……………(高二女) ……崎山監督
6. (ピアノ) ノクターン(夜曲)……………藤井潜氏
7. (新作童話劇) 太郎作地蔵……………(高一男) 水上作劇及監督
 役割 太郎作(柚木) 百姓(長田) 僧(納谷)
 商人(今井) 武七(原)
8. (筑前琵琶) 題未定……………永田幸好氏
9. (新作学校劇) 新浦島……………(五男) ……丸山作劇□山作曲
 森山監督
10. (新作こども劇) 小鳥の歌……………(高一女) 長里作劇及監督
 崎山作曲
 役割 鳥さす子供(前田) 鳥を貰う子供(今井) 其の姉(伊神)
 蝶を取る子供(柴内) 其の妹(永井)

第二部

11. (新作舞踊劇) 復活……………(一女) ……新井作劇
 新曲作踊及び監督
 役割 姉娘(翠川) 妹娘(永井) 小学生(祖山・寺門)
 巡查(渋澤)
12. (新作学校劇) 優しい心……………(五女) 長里作劇瀧田監督
 役割 優しい少女姉(石崎) 妹(有馬) 子守(今井等)
 目の悪い少女(町田) 婆さん(青柳)
13. (童話劇) 手提袋……………(高一女) ……崎山監督
14. (筑前琵琶) 題未定……………三津島旭勝氏
15. (新作学校劇) 心の叫び……………(五男) ……丸山作劇
 崎山作曲及監督
 役割 乃一(堀内) 春緑(田島) 学びの神(桜井)
 悪魔(乾) 其他(五社等)
16. (ピアノ) アンプロンプチオ……………(即興曲) ……藤井潜氏
17. (新作学校劇) 森の平和……………(四女) ……長里作劇及監督
 役割 桜の花の精(長郷) 其の母(伊神) 其の隣人(野村)
 鶯の先生(前田) 兎(今井) 兎を追ふ犬(□等)
18. (講演) 魔法のランドセル……………東京市社会教育課長
 帝国少年団理事長 大迫元繁氏
19. (新作児童劇) 海の底……………(六女) ……水上作劇
 及監督 崎山作曲
 役割 将子(小花) 闇(経塚・澤本・□桑・清水・中島)
 夜回り婆さん(神谷) 其他数人

20. 閉会の辞山崎校長

司会者 学校劇研究部

□ 景 図画科研究部

注・『写真帳 大正13年2月—昭和7年』の案内状，滝野川小学校所蔵。□部分は，折りめ部分の傷みのため判読できないことを示す。

VI 教育研究活動と公開指導研究会

教員の授業実践を支え，問題意識を高め，互いに学び合う場が校内の教育研究活動である。山崎校長は，赴任当初から教育研究の組織化に取り組み，1918（大正7）年時点で，資料3「教授法研究会」を組織している。

資料3 「教授法研究会」（1918年）

- 一 教授法ヲ研究センカ為ニ教授法研究会ヲ設ク
- 二 教授法ノ理論研究ハ左ノ方法ニヨリ之ヲ行フ
 - (1) 教科目ノ全部若クハ一部ニツキ分担者ヲ定メテ教授法ノ理論ヲ研究スルコト
 - (2) 各学年毎ニ其ノ学級ノ教授法ヲ研究スルコト
 - (3) 会員各自ノ研究シタル事項ヲ職員会ニ発表シテ研究スルコト
- 三 教授法ノ実際研究ハ左ノ方法ニヨリテ之ヲ行フ
 - (1) 教授細目及教案ニ関スル研究ヲナスコト
 - (2) 左ノ方法ニヨリ批評教授ヲナスコト
 - イ 同一教科目ニツキ各学年ヲ通シテ批評教授ヲナスコト
 - ロ 毎回教科目及分担者ヲ定メテ批評教授ヲ行フコト
 - ハ 学校長教室ヲ巡視シテ批評ヲナスコト
 - ニ 教員他ノ教授ヲ参観シテ批評ヲ行フコト
 - ホ 教授ニ熟達セル人ヲ聘シテ批評教授ヲ行フコト
- 四 本研究会ハ毎月一回開会スヘシ
- 五 学校長ハ本研究会ノ会長トナリ会務ヲ総理ス 会長事故アルトキハ上席教員其ノ代理ヲナス
- 六 本研究会開会ノ日時及科目教員ハ開会六日前ニ揭示スヘシ
- 七 批評会ノ便宜ヲ計ランカ為ニ左ノ批評要項ヲ定ム
 - ◎批評要項 1 準備 教授準備ハ当ヲ得タルカ又完全ナリシカ
 - 2 教材 イ 選択 児童身心ノ発達ニ適セシカ

- ロ 分量 時間ニ比シテ過不足ナキカ
 - ハ 排列 分節配布ハ適當ナリシカ
 - 3 教授ノ方法
 - イ 教順 理解及練習ニ適シタル教授ノ段階ヲ履行セシカ
 - ロ 教式 講話ハ能ク理解サレシカ問答ハ其ノ要領ヲ得タリシカ
 - ハ 練習 練習及復習ヲ適當ニ行ヒシカ
 - ニ 教弁 実物図画地図器械標本等ヲ巧ミニ利用セシカ
 - ホ 敏活 時間ヲ巧ミニ利用セシカ
 - 4 教授ノ成績
 - イ 目的 能ク当初ノ定メタル目的ヲ達セシカ
 - ロ 理解 児童ハ明瞭的確ニ理解セシカ
 - ハ 応用 能ク応用スルコトヲ得シカ
 - 5 教師
 - イ 挙動 慎重ナリシカ 快活ナリシカ 位置當ヲ得シカ
 - ロ 言語 分明ナリシカ 活氣アリシカ 音声ノ高低其ノ當ヲ得シカ
 - ハ 注意 諸事ニ周到ナリシカ 全児童ニ普遍ナリシカ
 - 6 児童
 - イ 興味 児童ハ其ノ教材ニ興味ヲ有セシカ
 - ロ 注意 児童ハ能ク教員ノ言語並ニ図画書籍等ニ注意セシカ
 - ハ 活動 心身ヲ適當ニ活動セシメタルカ
 - ニ 言語 明瞭ナリシカ
 - 7 管理
 - イ 衛生 衛生上ニヨク注意周到ナリシカ
 - ロ 整頓 教室内ノ整頓ハ齊整ナリシカ
 - ハ 訓練 命令禁止奨励等ハ適當ナリシカ

出典・『大正7年 学事 教育奨励補助』都立公文書館所蔵。

また、17年後の1935（昭和10）年、山崎校長は瀧野川小における教育研究活動の現状とそれに対する自分自身の姿勢を次のように述べている。「私の学校では、子供の自発活動を尊重するやうに、又教師の自発的活動を尊重いたします。研究の自由を尊重しております。校長の意見を通さうなどいう考

は私にはありません。如何やうにも研究して呉れるやうに、画一的ではいけないと思ひます。しかし、方針は定まつているのですから、そこに統一があると共に、各々の個性が発揮されてゐると思ひます。¹⁹⁾」彼は、教員の自発的な研究を発展させようとしていた。子どもの自発的な活動を導く根幹になるものが、教員自身の自発的で、自由な教育研究活動であるという関連性を自覚していた。そして、学校長として、このような教員の教育研究活動を育もうとする考えをもっていた。それが、本論文「III 教員構成」で紹介したように、各教員の教育研究へと反映されていたのだと考える。

瀧野川小における教育研究活動について、保存されている学校日誌を資料として、教育研究活動を一覧化したものが、表2「瀧野川尋常高等小学校の教育研究活動」である。瀧野川小では、教育研究委員会が毎年継続的に設けられており、平均すると2ヶ月に1度の割合で開かれていた。これが中心となって、教育研究活動を組織していたと考えられる。そして、名称は年によって異なるが、実地授業の検討や指導法の研究会が盛んに行われていた。

先にみた教育研究体制が、問題意識や研究力を校内の教員同士で育む機会

表2 瀧野川尋常高等小学校の教育研究活動（1932年1月～1937年12月）

年	教育研究活動の種類
32	教育研究委員会、研究授業、研究発表会、職員会、批評座談会、公開指導研究会
33	読書研究発表会、新任者指導会、指導実地研究会、指導研究会、職員会
34	指導研究会、研究指導会、教育研究委員会、職員会、各科研究委員会、学習研究会、各科研究主任会
35	指導研究会、校内学習研究会、合科指導研究会、公開指導研究会、教育研究委員会、各科研究委員会、学年主任会、研究指導会、職員会
36	教育研究委員会、学習研究会、教科別研究会、校内学習研究会、指導研究会、指導実地研究会、研究指導会、批評会、職員会
37	研究指導会、指導研究会、教育研究委員会、公開指導研究会、職員会

注・各年度の学校日誌にもとづき作成。瀧野川小学校所蔵。

であるのに対して、公開指導研究会は、外部に対して教育研究の成果を示し、その意義を問う機会である。東京市の他の新教育実践校もそうであったように、瀧野川小では、継続的に公開指導研究会（年によって、公開研究会とも称していた）を実施していた。当時の東京市では、今日のような研究指定校制度は実施しておらず、新教育実践校の公開指導研究会も個々の学校の自主的なものであった。雑誌記事や残された資料から見ると、瀧野川小の公開研究会は、1929（昭和4）年から1935（昭和10）年までの実施が確認できる。第1回公開研究会（1929年）の際に発行された紀要『²⁰⁾ 我校の实地研究』には、各教員の研究発表が掲載されている。低学年から高等科まで、教科も多様であり、教育内容・方法の多岐にわたる分野が研究の対象となっている。

「第6回 公開学習指導研究会」1931年2月14日、瀧野川町教育会主催「²¹⁾ 教育研究会」2月15・16日は、14日の朝だけでも500名を越える参加者のなかで行われた。資料4「第6回 公開学習指導研究会」にみるように、教員全員、全学級の公開という姿勢を貫いている。そして、教員が交替で出張し、授業参観し、また研究交流を重ねてきた奈良女高師附属小学校の教員を講師として招き、同教員による模範授業も2日間にわたって実施されている。

資料4 「第6回 公開学習指導研究会」（1931年2月14日）

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 一 学習指導の実際（午前九時より正午迄） | |
| ○第一時 | 第二時——本校職員三十三名 全科目公開 |
| ○第三時 | 奈良女高師清水訓導 算術尋四男 |
| | 同 秋田訓導 読方尋五女 |
| 二 講演（午後一時より四時迄） | |
| | 教育革新の機運切りに動く 木下主事 |
| | 読方の独自相互学習 秋田訓導 |
| | 数量生活と問題構成の指導法 清水訓導 |

出典・「公開学習指導研究会概況」『新教育研究』1931年3月，p. 6。

「第10回公開指導総合学習発表会」は、1935（昭和10）年に催されており、その概要が、資料5「新総合教育公開指導研究会」である。1935年の時点でも昭和初期と変わらない姿勢で、公開指導研究会を行っていたことがわかる。

資料5 「新総合教育公開指導研究会」(1935年2月15・16日)

一	瀧野川尋常高等小学校		
二	二月十五,十六両日	毎日午前九時より午後四時迄	
三	講演	奈良女高師主事	木下竹次教授
	実地指導 (国史科)	奈良女高師訓導	大松庄太郎氏
	同 (地理科)	同	鶴居滋一氏
四	研究教授 全校公開 研究発表		
	合科教育について	瀧野川校	桐谷訓導
	新総合教育の提唱	同 校	山崎校長
五	会費はいりません。		
	申込所 東京瀧野川尋高小校		

出典・「研究会案内 瀧野川校新総合教育公開指導研究会」『新教育研究』第5巻第2号, 1935年2月, p. 2。

VI 学校劇の発展としての「総合学習」

学校劇を構成する基本姿勢を貫きながら, また, 奈良女子高等師範学校附属小学校の実践に学びながら, 瀧野川小で構成されたのが「総合学習」である。3年次までは合科学習を実施し, 4年次から6年次までは分科学習を行いつつ, 毎週1回「総合学習」の時間を設けた。そして, 低学年から高学年に至る学習の成果を発表する場所として, 総合学習発表会が, 毎週1回, 1学期1回の割で継続的に実施されたのだった。

総合教育の基本的な考え方が, 1935(昭和10)年時点での瀧野川小の新教育実践の総括の書とも言える『新総合教育の実践』において次のように述べられている。「部分々々の単なる集合が, 統一ある全体ではないのと同様に, 個々人の集合そのままだが社会でも国家でも無い。しかるに従来の教育は, 個人を本位とした考への下に営為されて来た。これは生活具体としての生きた人間—社会人としてのみ真に人たり得る人間—であることを忘れたものである。教育は思惟されたる抽象的人間を作るので無く, 生々とした具体の人間

を作るものである以上、社会人としての教養を志向せねばならない。協力奉仕、相互扶助の全体的生活意識を高揚することが肝要である。総合学習は、かかる訓練の有力なる一方途であり、進展社会の実態を把握させようとするものである。²²⁾ 実社会の営み、自然の営み、これら総てがつながっている中で子どもたちは生きている。これらの営みの関連性を活かして、子どもたちの学習教材とする考え方と実際の努力、これが総合教育の基本姿勢であった。

だからこそ、教材選択、学習過程についても、「総合学習の新たな意義は、全級の児童と共に学習題材を選定し、構成する過程の中に存在する。²³⁾」というように、児童が主体的に関われるような方向性をとった。

尋常科低学年から高学年、そして高等科までの学習成果を発表する機会として、実施されていた総合学習発表会について、瀧野川小の資料から1932(昭和7)年12月4日の発表会の内容と、33(昭和8)年2月9日の内容が確認できる。32年の内容が、資料6「総合学習発表会 プログラム」である。児童の実生活のなかから題材をとったものが「ねずみ」「クリスマス」「遠足」「太郎さんの家」「日光と健康」、また、教材のなかから「フレデリック大王」「伊藤博文」「四国地方を語る」「呉鳳」が選ばれ、郷土に関わる題材では「瀧野川今昔物語」「江戸から東京へ」「町の乗物」「荒川郵便局」「動物園」がある。舞台発表という点では初期の学校劇を生かしながら、調査発表、作品発表、合唱、演劇等の多様な形態で、学級の学習成果が発表されている。

資料6 「総合学習発表会 プログラム」(1932年)

日時 昭和7年12月4日(日曜)午前九時開始
場所 本校雨天体操場

総合学習発表会 プログラム

1. 開会の辞
2. 君が代
3. 学校長の挨拶
4. 実演

題目	学級	指導者
1. フレデリック大王	高二ノ三	白石
2. 瀧野川今昔物語	尋六ノ二	紀平
3. ねずみ	尋一ノ桜	高野
4. マゼラン	高一ノ三	秋浜
5. クリスマス	尋二ノ桃	飯田
6. 伊藤博文	高二ノ一	菅家
7. 四国地方を語る	尋五ノ一	岡山
8. 汽車の旅	尋六ノ三	関田
9. 呉鳳	尋四ノ三	本田
(昼 食)		
10. 日露戦役	尋六ノ一	久保田
11. 遠足	尋三ノ梅	坪井
12. 江戸から東京へ	高一ノ一	水越
13. 肉弾三勇士	尋二ノ梅	北郷
14. 満州物語	高一ノ五	高知尾
15. 胃とからだ	尋四ノ二	佐藤
16. 米	高二ノ四	鈴木
5. 学校長講評		
6. 閉会の辞		
		以上

出典・『写真帳 大正13年2月—昭和7年』の案内状, 瀧野川小学校所蔵。

おわりに

瀧野川小の新教育は、学校を変えようとした山崎校長の信念と、地域の変貌と、新教育運動の影響が重なって生み出された。教育条件の面では、分校の独立と瀧野川小の増改築が繰り返され、関東大震災後は二部授業が続き、1学級の児童数が60名を越えるという、児童の活動を中心にした学習を組み立てるには困難な条件のもとでの教育実践であったことがわかった。

学習発表の場として学校劇を位置づけたことが、その後の瀧野川小の新教育を方向づけている。名称は、学校劇から「総合学習発表会」へと変化して

いくが、舞台を発表の場とする姿勢は、全く変わることなく貫かれている。そして、各学級の発表の多様性に対応できる形態へと展開している。総合的な学習と、舞台発表を一体化させたのである。

このような実践は、一人の教員が6年間持ち上がることで、総合学習を時間割上に位置づけること、学級毎の発表の場を確保すること、そして、教育研究のできる学校体制をつくること、父母や地域の協力をえること等によって支えられていたことも明らかになった。

瀧野川小の総合教育の全体像について考察するために、今後は、総合学習の具体的な実践に即した分析と、一人の教員に即した教育実践の分析及び検討を行うことを課題とする。

謝辞

調査に際して、岡山光雄氏・宮本三五郎氏（ともに元・瀧野川小教員）から貴重な情報を提供していただいた。また、小学校に所蔵されている公文書の閲覧に際しては、中島敬太郎氏（元・瀧野川小校長）、山高暉夫氏（元・瀧野川小教頭）に便宜を図っていただいた。厚くお礼申し上げる。

注

- 1) 先行研究の主なものをあげる。井野川潔・川合章編『日本教育運動史Ⅰ』三一書房、1960年。中野光『大正自由教育の研究』黎明書房、1968年。国立教育研究所『日本近代教育史Ⅰ』教育研究振興会、1974年。海老原治善『現代日本教育実践史』明治図書、1975年。川合章『近代日本教育方法史』青木書店、1985年。
- 2) 関根益次郎「瀧野川の小学校物語」『瀧野川3号』「瀧野川」編集委員会、1984年、p. 43。
- 3) 「瀧小九十年の歩み」『瀧小九十年のあゆみ』東京都北区瀧野川小学校、1979年、p. 16。
- 4) 山崎菊次郎「私の学校経営」『教育論叢』34-1、1935年7月、p. 20。

5) 規約第一条では、目的が「本会ハ瀧野川尋常高等小学校ト其ノ児童ノ家庭トノ関係ヲ親密ナラシメ兼テ児童教育上ノ後援ヲナスヲ以テ目的トス」と規定され、会員は、「児童保護者其ノ他ノ篤志家」(第三条)で構成され、普通会员(児童保護者)、賛助会員(本会ノ趣旨ニ賛成スル篤志家)、特別会員(発起人並ニ一時ニ金拾円以上ノ金品ヲ寄付シタルモノ及本会ニ特ニ功劳アリテ役員会ノ決議ニヨリ推選セラレタル者)(第四条)の三種に区分されていた。普通会员の会費は、「就学児童一人ニツキ毎月金式拾銭」、賛助会員は同額を三年間継続して支払うことになっていた。支出項目は、次の5点になっている。懇話会費、児童給与品費、教育講話会費、教育品購入費、その他必要と認めたる費用。

北区教育史編纂調査会『北区教育史 資料編第三集』東京都北区教育委員会、1995年、pp. 60～61。

- 6) 山崎菊次郎「私の学校経営」『教育論叢』34-1, 1935年7月, pp. 18～19。
- 7) 「私の学校経営」によると、母の会は各学級ごとに作られた組織で、学校が児童をどのように指導しているのかを知るために、学級ごとの参観を実施していた。「読方の教授でしたら全部の人に書物を貸与いたします。どんな教へ方をしているのかに注意して貰ひます。授業後質問も受けます。」同書, p. 20。
- 8) 東京都北区立滝野川小学校所蔵の履歴書にもとづいている。
- 9) 山崎校長は深川尋常小学校に1946年まで務めた。
- 10) コラム「校長先生」『東京朝日新聞』1924年10月31日, p. 6。
- 11) 記念編集委員会『滝野川小学校創立八十周年記念記念誌』1970年, pp. 63～64。
- 12) 山崎菊次郎「私の学校経営」『教育論叢』34-1, 1935年7月, p. 17。
- 13) 為藤十郎「新教育人総まくり(二)」『新教育研究』5巻8号, 1935年8月, p. 91に紹介されている。
- 14) 山崎菊次郎「私の自叙伝」『新教育研究』1935年2月, p. 86。
- 15) 滝野川小学校所蔵のアルバム(1922～1933年)の記録による。
- 16) 「小学校が課目にして 芝居を教へる 東京では瀧野川校が皮切りで 新学年から每日一幕づつ」『東京朝日新聞』1924年3月18日。
- 17) 注16の記事に加えて、『報知新聞 夕刊』『東京朝日新聞 夕刊』1924年2月19日、『東京日日新聞』『萬朝報 夕刊』20日、『東京朝日新聞』21日に取材記事が掲載された。
- 18) 木戸若雄『大正時代の教育ジャーナリズム』玉川大学出版部, 1985年, pp.

222～223。これは、前掲の山崎菊次郎「私の自叙伝」に基づいている。

- 19) 山崎菊次郎「私の学校経営」『教育論叢』34-1, 1935年7月, p. 18。
- 20) 小原國芳編『日本新教育百年史 第4巻』玉川大学出版部, 1969年, pp. 381～383。
- 21) 「公開学習指導研究会概況」『新教育研究』1931年3月, pp. 6～7。
- 22) 山崎菊次郎『新総合教育の実践』文教書院, 1935年, p. 5。
- 23) 同書, p. 87。